

次兄

二十三回生 佐怒賀（片山）弘子

次兄の片山晴夫様（二十一回生）が二〇一二年九月二十一日に急逝されました。ご冥福をお祈り申し上げます。今回はそのお兄様を偲ぶ短歌をご寄稿頂きました。佐怒賀弘子さんは馬場あき子氏（日本芸術院会員、朝日歌壇の選者）主宰の短歌結社「かりん」に所属され二〇一二年四月に第一歌集『読点』を角川書店より上梓されました。

忽然と兄逝きしとう報せ受く心筋梗塞に七十五歳

あまりにも端然と兄臥していてふいに泣き方わからなくなる

字廊に立たされし兄遠くより見守るわれに胸をほりたり

じゃんけんぼんあいこのつづきし兄消えてすさまじく散る大銀杏の黄

わが内にとどまりいるは誰なるや亡き兄はかけっこに勝たせてくれし

山ゆりのやさしさに遇う黒川谷戸消息しらすぬ君をうらまはず

鬼煙^{おにふす}べ頭をなでたれば煙吐くさびしさゆえやぼぼーんぼっぼと

大樟のくらがりにしばし埋没す翅ゆがめつつ黄蝶も入り来

草間彌生^{ドット}水壺の増殖らんらんとわれをはじめて画布をはみ出す

店先のフルーツパブリカへセニヨリータン駆け出したくてひしめいている



歌集
読点
Toten
Sano Hiroko
佐怒賀弘子

歌集の中心部をなしているのは「消失の美学」である。このされてゆくもの、消されてゆくもの、つまりこの世の雑事を離れ、器音教を離れ、すべて一人の身軽さになる、そういうことへの機微な意志がはたらいっているのだ。作者の捉えた社会状況や人間関係は多くの問題を讀者に提供するのであろう。

岩田正

角川
平成歌人
双書
角川書店

カバー絵 オデイロン・ルドン「少女と花」